

イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第十四卷 全校生徒の前で公開調教

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 講堂に響くオス犬の喘ぎ声

■ 海老沢薫 BLOG

■ 海老沢薫 Web 連載小説

※ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ サイドストーリー 『イケメン教師の受

難 伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報

そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難 伝説の水泳大会篇」第十四巻 全校生徒の前で公開調教」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

い。

■ まえがき
 講堂のステージ中央に置かれた演台の上に
 一糸纏わぬ姿で縛られたまま、生徒達からお
 仕置きを受ける羽目になったイケメン教師の
 三神真琴。
 大股開きのイケメン教師の前には生徒達が
 順番に並び、その〇〇を弄り倒した。
 「三神先生、せっかくだからお仕置きをして
 くれた生徒一人一人に御礼を言いなさい！」
 傍で見守るベテラン男性教師はそう言ってい
 ケメン教師をさらに精神的にいたぶり、脅迫
 された真琴は仕方なく入れ替わり立ち替わり
 目の前に現れる生徒達に向かって屈辱のセリ
 フを吐いた。
 「僕のオ、オ○ン○ンを・・・扱いてく
 れてあげよう・・・」
 イケメン教師の口から飛び出したあまりに破
 廉恥な言葉に生徒達は驚き、悶え狂う真琴に
 向かって次々と罵声を浴びせる。
 「三神先生マジやべえ！」

「教師がそんなこと言うなんてサイテー」
 「イケメン教師が、いに本性を表したな」
 真琴がベテラン男性教師から無理矢理卑猥
 なセリフを言わされていることを何も知らな
 い生徒達は、イケメン教師の事を完全にド変
 態だと信じ込み、激しい手淫で容赦なく絶頂
 へと追い詰めていった。
 すると、そんな真琴の前に担任するクラス
 の男子生徒、相葉が現れ・・。
 「先生、俺の手でイかせてやるぜ」
 相葉はそう言うのと、担任教師の〇〇を力任せ
 に扱き始めた。
 「ああっ、やめてくれ・・あああっ」
 真琴は激しく悶え狂い、ついにその時が訪れ
 ようとしていた。
 絶頂を予感した真琴は、さっきベテラン男
 性教師から耳元で指示された命令を思い出し
 新たな屈辱のセリフを叫んだ。
 「三神真琴、オ、オ○ン○ンからミルクを發
 射しまゝす！あああっ」

イケメン教師の放ったあまりに破廉恥な叫び
声は傍に立つベラン男性教師の持つマイク
に拾われ、講堂全体に響き渡り・・・。
前代未聞のお仕置きショーはさらに過激さ
を増してゆくのだった。

■ 第一章 講堂に響くオス犬の喘ぎ声

高校の講堂は異様なまでの熱気に満ち溢れていた。講堂のステージ中央に置かれた演台の上にはイケメン教師の三神真琴が全裸大股開きの恰好で緊縛され、その前には生徒達の大行列が出来上がっていた。

ベテラン男性教師が企んだ若きイケメン教師のお仕置きショーは、希望する生徒全員にイケメン教師のイチモツを扱かせるという、あまりに過激で卑猥なものであった。生徒達は順番に大股開きのイケメン教師の前に立ち一人につき持ち時間三十秒でイチモツを扱き続け、幸運な生徒達が見事イケメン教師を射精させることに成功した。

「三神先生、せっかくだからお仕置きをしてくれた生徒一人一人に御礼を言いなさい！」

傍にいろベテラン男性教師がそう命じると、真琴は首を左右に振って拒否したが、常套文句で脅迫されると仕方なく黙って頷いた。

而して、真琴は目の前に立ち自らのイチモ
 ツを扱く生徒達一人一人に向かって屈辱のセ
 リフを吐くことになった。
 「僕のオ、オ○ン○ンを・・扱いてくれて
 ありがとう・・」
 真琴はベテラン男性教師からさつき耳元で教
 えられた卑猥なセリフを震える声で吐いた。
 そしてその声はベテラン男性教師が口元に当
 てたマイクを通じて講堂全体に響き渡り、そ
 れを聞いた生徒達の間から驚きの声が上がっ
 た。
 「三神先生マジやべえ！」
 「教師がそんなこと言うなんてサイテー」
 「イケメン教師がついに本性を表したな」
 生徒達は演台の上でイチモツを扱かれ悶え狂
 うイケメン教師に次々と罵声を浴びせ、真琴
 は快感の中でだんだん居たたまれない気持ち
 になっっていた。
 ああっ、僕はこんなこと言いたくて言っ
 てるんじゃない・・ああっ、みんな僕の事を

変態教師だなんて思わないでくれ・・・ああ
あ・・・°真琴は心の中で必死にそう訴え
たが、その声が全校生徒に届くはずもなく、
真琴がベテラン男性教師から脅迫され、卑猥
なセリフを無理矢理言わされている事を知ら
ない生徒達は、イケメン教師にますます鋭い
好奇と軽蔑の眼差しを向けた。
その光景を見たベテラン男性教師は、演台
の上で悶える真琴の耳元でさらなる屈辱の命
令を告げた°ああっ、そんなこと・・・°真
琴はあまりに屈辱的な命令に堪らず唇を噛み
しめ苦悶の表情を浮かべた。
しかし、弱みを握られ逆らう事のできない
真琴は、ベテラン男性教師の命令に従うより
他なく、さらなる羞恥地獄の深みへ堕ちるこ
とを覚悟するしかなかった°
「先生、俺の手でイかせてやるぜ」
怯える真琴の前にそう言って現れたのは、他
ならぬ真琴が担任するクラスの生徒でクラス
委員の相葉だった°

「・・・」
あまりにも恥ずかしい姿で相葉と対面するこ
とになった真琴は返す言葉もなく、屈辱のあ
まり大股開きの下半身を激しく震わせた。
羞恥に咽ぶ担任教師の姿を見た相葉は不敵
な笑みを浮かべ、その右手を真琴の股間へ伸
ばしていくと、大きく膨らんだイチモツを驚
掴みした。
「あっう」
相葉にイチモツを強く握りしめられた真琴は
思わずオスの喘ぎ声を漏らし、天を仰いだ。
「先生、良い声で鳴くんだぜ」
相葉はそう声を掛けると、真琴のイチモツを
激しく扱き始めた。
「あああっ」
真琴は演台の上で下半身を揺らして悶え狂い
すでに沢山の生徒達にイチモツを扱かれて火
照った体は一気に燃え盛っていった。
相葉は自分の手で担任教師を射精させるの
がクラス委員としての責務だとも思ってい

るのか、三十秒以内に仕留めようと力任せに扱き続けた。
「ああっ、やめてくれ・・ああっ」
真琴は首を左右に振りながら必死に許しを乞うたが、儂くもついにその時は訪れることになった。
射精を確信した真琴は、下半身を揺らしながら、さっきベテラン男性教師から耳元で命じられた言葉を思い出し、目の前に立つ相葉に向かつて屈辱のセリフを叫んだ。
「三神真琴、オ、オオンオンからミルクを発売しまゝす！あああっ」
真琴の叫び声は傍に立つベテラン男性教師が口元に当てたマイクに拾われ、講堂全体に響き渡った。
「オオッー」
イケメン教師の口から飛び出した何とも大胆な発言に生徒達は驚きの唸り声を上げ、次の瞬間、真琴のイチモツから白濁の汁が勢い良く発射された。

「オオッー」
講堂にはまたも生徒達の唸り声が響き渡り、
皆、演台の上で恍惚とした表情を浮かべるイ
ケメン教師の姿を目を血走らせながら見つめ
た。
全校生徒の目の前で担任教師を見事射精さ
せた相葉は右手を高々と掲げ、指先に付着し
たイケメン教師の白濁の汁を勝ち誇ったよう
に見せつけた。
程なくして快感の余韻から覚め我に返った
真琴は、傍にいたベテラン男性教師に促され
相葉に向かって今度は屈辱の御礼を告げた。
「僕のオ、オ○ン○ンを扱いて、しゃ、射精
させてくれて・・・ありがとう・・・」
真琴はそう言い終わるとあまりの恥ずかしさ
に軽い目眩を覚えた。
「先生、この後もまだまだ頑張れよ！」
相葉はそう言って担任教師を鼓舞すると、颯
と演台の前から去って行った。
続いて、射精したばかりのイケメン教師の

前に立ったのは、またも真琴が担任するクラス男子生徒だった。
「先生、よろしく！」
男子生徒は不敵に微笑みながら真琴に声を掛ける。と、早速股間に手を伸ばしイチモツを扱き始めた。
「ああっ」
真琴はたった今射精を終えたばかりだというのに、すぐに喘ぎ声を放ち、演台の上で下半身を揺らし始めた。
「先生って、ほんとスケベ野郎だなへ笑」
男子生徒がそう言って笑うと、真琴には返す言葉もなく、担任としてのプライドから何とか快感に耐えようとしたが、何度も射精している間にすっかり快感中毒に陥ってしまった。体はもはや制御する事ができなかった。
「ああっ、やめてくれ・・・」
真琴は目の前で自分のイチモツを扱く男子生徒に向かって懇願した。
「先生、そんな事言っても、チ○コがもうビ

ンビンだぜ（笑）

男子生徒がそう言うように、真琴のイチモツはいつの間にか男子生徒の手の中で恥ずかし

いほど大きく膨らんでしまっていた。

「ああっ、そんな・・・」

真琴は大きく開いた股間のど真ん中で反り立つ自らのイチモツを見ると、自分が何とも情けなく思えて自己嫌悪に陥りそうになった。

結局、その男子生徒は持ち時間の三十秒の間に担任教師を射精させることができず、名残惜しそうに真琴の元から去って行ったが、

間違はなく真琴の体には再び火が付き、次の射精も時間の問題のように思えた。

真琴の前にはまだまだ大勢の生徒達が列を作っ

て並び、射精を見て興奮した生徒達がど

んどん席を立ち上がって列に加わり出したた

め、その数は増えていく一方だった。

「僕のオ○ン○ンを扱いてくれてありがと

う・・・」

真琴はその卑猥なセリフを念仏のように何度

も 唱 えて いる うち に だ ん だ ん 妖 し い 感 覚 に 脳
内 が 侵 さ れ 、 自 分 が た だ の 射 精 マ シ ー ン の よ
う に 思 えて き た 。
そ れ か ら も 真 琴 は 生 徒 達 の 手 で 幾 度 と な く
果 て 、 演 台 の 周 り に は 大 量 の 白 濁 の 汁 が 飛 び
散 り 独 特 の 臭 い を 放 っ て い た 。
「 オ イ 三 神 先 生 、 し っ か り す る ん だ ! 」
何 度 目 か の 射 精 を 果 た し た 真 琴 が い つ ま で も
グ ッ タ リ と 項 垂 れ 快 感 の 余 韻 に 浸 っ て い る と
ベ テ ラ ン 男 性 教 師 が そ の 頬 を 軽 く 叩 い て 呼 び
掛 け た 。
「 お 願 い で す 、 も う 許 し て く だ さ い ・ ・ ・ 」
真 琴 は 朦 朧 と す る 意 識 の 中 で 必 死 に 許 し を 乞
う た 。
そ の 姿 に は も は や 教 師 と し て の 面 影 は な く
快 感 に 溺 れ た た だ の 廃 人 の よ う に し か 見 え な
か っ た 。 ベ テ ラ ン 男 性 教 師 も さ す が に こ れ 以
上 の 手 コ キ は 危 険 な よ う に 思 え 、 ま だ 列 に 並
ん で い る 百 人 以 上 の 生 徒 達 に 向 か っ て マ イ ク
で 呼 び 掛 け た 。

「三神先生のアソコを扱くお仕置きショーは
今日はこれで中止します！」
ベテラン男性教師がそう告げると、講堂には
生徒達のブーイングが響き渡った。
「まだ列に並んでいる生徒諸君には今度改め
て三神先生のアソコを扱く機会を与えます！
ベテラン男性教師が慌ててそう付け加えると
ブーイングはようやく治まり、演台の前に並
んでいた生徒達はそれぞれの席へと戻ってい
った。
演台に座る真琴は朦朧とする意識の中で少
しホッとしたり表情を浮かべたが、これでお仕
置きショーが終わりではないことをこの後知
る事になるのだった。

■ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 連載小説『イケメン教師の受難伝説
の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか
各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『イケメン教師の受難 伝説の運動会篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195>

・ ・ ・ 二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドルの存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罨に嵌められ大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事ランプリを受賞した春輝はセレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からスード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることになった。

り・・・。
後日、早速授業中の大教室で撮影をするこ
とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命
じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏
わぬ姿でポーズを披露する。
そうして撮影はだんだんエスカレートして
いき、イケメン学生は授業中の大教室だけで
なく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄
を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。かつてはやかたつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられたかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。